

第11章 考察

大蔭遺跡2・4A区出土の縄文・弥生土器について

中村 友博 (山口大学人文学部)

1. 出土土器

2区イ～0グリッドおよび4A区からは、小破片を含めると約50個体ほどの土器が出土した。

この報告は出土直後に中村が土器を実測し、そのファイルをもとに宮田が実物と対照し図面を修正したものである。その結果、大勢に異同はないが、予報（宮田健一「島根県津和野町の縄文遺跡の調査成果」『縄文後晩期の西部瀬戸内地方』第18回中四国縄文研究会、2007年）とはわずかに図面の違いがある。

時期の判定できる土器は、ほとんどが縄文時代晩期終末の刻目突帯文土器群と弥生時代前期初頭の土器である。ごく少量、別の時代と時期の小破片が混在しているが、遺物の包含層である6～8層は、したがってきわめて短期間に堆積、埋没した遺物包含層である。しかし下層から晩期の刻目突帯文土器、上層から弥生前期土器という層位的な出方をしておらず、出土状況は刻目突帯文土器と前期弥生土器が混然一体となっていた。

出土した土器の口縁部と底部は、すべて第38図～第41図、および第69～70図に示した。2種の土器、つまり刻目突帯文土器の1群と前期弥生土器の量比は、口縁部の概数でいえば、縄文晩期7対弥生前期3である。底部の量比は、縄文晩期9に対して弥生前期4である。これから見ると縄文晩期の土器ほうが倍以上弥生土器よりも多いが、破片の残りがよいのは前期弥生土器の甕形土器である。

2. 刻目突帯文土器の1群

刻目突帯文土器と同時期の土器の組み合わせを指す。この遺跡の刻目突帯文土器の特長は、刻目が大きいことにある。刻目が大きいことは、通例、突帯も太いということであって、これが顕著な第1の特長である。第2の特長は、口縁の端部の断面を丸く仕上げ、平らに面取をしないことである。ただし例外が1例（第39図19）あって、狭い口縁端部に刻目を装飾する。これは刻目突帯文土器であっても先行する古い型式で、器壁の薄い特長と併せて、山口県防府市の奥正権寺遺跡（山口県教育委員会『奥正権寺遺跡』I、1984年）から出土した刻目突帯文土器と類似する。ほかの器壁は、刻目突帯文土器としては厚手のほうである。

器形について、口縁部の外形は外反あるいは直口するものが圧倒的に多く、内湾するもの（第39図28）はごく稀である。この内湾口縁の端部は面取せず、線状に尖っており、頸部に焼成後の両面穿孔による小円形の穴がある。大きさの特長については、復元できる量が少ないために、はっきりと断定できない。大きさの部類では中型であろう1例（第38図3）は、胴の下部が急激にすぼみ底部に移行する。このように下胴が急激に収約する形態の深鉢は、山陰地方の刻目突帯文土器の特長であって、出雲地方や伯耆地方に多数の類例があり、倉吉市イキス遺跡（倉吉市教育委員会『北面遺跡群イキス遺跡発掘調査報告書』1989年）のように弥生時代になっても継続する。こうした器形の地域性から見れば、この遺跡の刻目突帯文土器は、九州地方のように内傾する口縁部がないことも特徴的である。いっぽう山口県の日本海沿岸には内傾する口縁部をもった刻目突帯文深鉢があるから、そのあたりが九州系の刻目突帯文深鉢の分布の北限にあたる。

刻目には二枚貝の脈筋の圧痕はなく、平坦な篋状工具を斜めに当てた陰刻によるものである。平面形は逆向きのD字形に近く、断面は向かって右側が深く、左側に浅く傾斜する。まれに縦方向にノッチに近いI字形平面の狭い刻目がある（第39図24）。

突帯の条数は、口縁部に1条のみの可能性が高く、頸部ではないかと思われる破片（第39図32）が1例あるにはあるが、口縁が欠損した破片とも見える。

精製の鉢 小型の土器で、半球状の器形と胴部が屈折する器形がある。半球状の鉢は、口縁部を平らに広く面取する（第39図9）。この手法は他の縄文土器にないので、弥生土器と見なすほうがよいかも知れない。内外両面とも研磨する丁寧な作りであるが、口縁部には煤が付着する。

胴部が屈折する鉢には、頸胴部の境界で1回だけ屈折するもの（第39図3、4）と口頸部でもう1回、2度屈折するものがある。後者は上胴部に篋描きの斜線を装飾する（第39図5）。そのほか、半球形よりも胴部が浅い、椀状の小型鉢があって、この例は通則のように口縁の断面を丸く仕上げる（第39図13）。

精製浅鉢 浅鉢は精製品であって、器壁が薄造りである。口縁部が大きく広がる種類と短く立ち上がる器形がある。口縁部が広がる器形は、ひくい山形ないし波状口縁となって、端部の内面側の角に小さな刻目を装飾する（第39図6）。この器形は胴部との連結が稜をなすが、その境界線にも小さい刻目を付設するものがある（第39図7）。口縁が山形になるものには、外周に刻目突帯文を装飾し、深鉢ではなく、浅鉢となる1例（第39図10）がある。

破片が小さいので、器形の正しい復元ができないが、口縁部に刻目を付設するもの（第39図18）や外周に突帯を貼るもの（第39図16）は、口縁部が広がるタイプであろう。口縁部の内面が段差をなすもの（第39図15）、内面が肥厚するもの（第39図23）などは、どの程度口縁部が広がるのか、よくわからない。口縁の端部を細く丸く仕上げた小形品（第39図17）はあまり口縁が広がらない浅鉢であろう。

口縁部が短い精製浅鉢は、胴部が屈折して内湾する頸部と連結する（第39図8、12）。わかりやすくいえば、夜臼式の屈折浅鉢の頸部の外形が曲線化したもので、口縁の端部も面取せずに、丸く仕上げる特長がある。

そのほか、精製浅鉢には口縁部が鍵形に2回屈折する波状のもの（第39図14）があって、おそらく第39図19のような古式の刻目突帯文土器に伴ったものと見られる。

粗製土器 粗製土器の口縁部が7点ある。数が少ないのは、刻目突帯文土器を除外して記述したからである。全体に刻目突帯文土器よりも器壁が薄く、口縁の立ち上がりも垂直気味で、大きさも中型の砲弾形の深鉢形土器となるであろう。口縁端部はせまく面取するものと刻目突帯文深鉢の口縁部と同様に丸く仕上げるものとは、半々である。外面の調整は撫で仕上げであるが、条痕を横方向に付設するものが1例（第39図34）ある。

小形の粗製土器の口縁部は2例（第39図38、39）で、そのうち椀状の1例（第39図39）は手づくねのように内壁に指による凹凸が顕著である。

後期の土器 磨消縄文を装飾する後期中葉の小破片（第1図1、2）で、同一個体の可能性がある。縄文は巻貝による擬似縄文である。包含層から混入した遺物であろう。

3. 前期弥生土器の1群

壺形土器、甕形土器、鉢形土器の3種がある。

壺形土器 壺形土器の口縁部の破片は少なく、中型品のやや小さい部類のものが出土した。外反する端部を丸く仕上げ、研磨して調整する。1片には下地の刷毛目痕が残る（第38図4）。薄

手の壺の口縁部で端部は残っていないが、内湾する頸部の上縁に浅い段差が残るものがある（第40図7）。

胴部は大きい破片では、頸部との境界に段差が残るが、小さい破片では篋ないし貝殻による線描き紋だけが残る。逐次述べれば、第40図2は段差のみ、3は段差の下に横の区画線が1条、4は段差の下に横の区画線を引き、その下に連弧文、5は斜線帯文、6は複数の横線文、8は羽状文の上がおそらく梯子状の沈線、9は山形紋ないし連弧文、10は山形文ないし連弧文である。

甕形土器 甕形土器は口縁部に破片の大きなものがあって、全形が推測できるものがある（第38図10～13）。ただし胴部は接合しない破片が多く、図上による復元である。

この遺跡の甕形土器で重要なことは、すべて頸部に段差を付設する事実である。頸部の段差は上が高く、下に低い、刻目を附加するものとそうでないものとの2種類がある。刻目のないものは段差が高く（第38図7、10）、刻目を附加するものは段が低い。刻目は縦方向の短いノッチで、方向は斜行するばあいもある。間隔は密接である。

口縁はみじかく外反し、端部を面取して必ず刻目を付設する。刻目は口端面に付設するものと下端の角に付設するものがある。板付I式と共通する特長である口端面に付設したものは数が少ない（第38図10、第40図13）。下端に付設する土器は、「口縁下端凸状甕」（豆谷和之「前期弥生土器出現」『古代』第99号、1995年）に相当し、口端面を横撫でして下端がわずかに延伸している。刻目は小さく、密接である。

甕形土器の外表面は刷毛目が顕著であるが、頸部の下に段差を整形する分、工程が複雑になっている。基本は底部から上方に、次に頸部から下方に調整した後、上胴部で篋を下方に引いて段差を付設し、その後、段の上の頸部側を横方向に篋で調整し、さらにその上の方の頸部を横撫でする。

内面の調整は一般的な甕形土器と同じで、斜行刷毛の後、撫でて調整し、口縁部では刷毛目を横撫でして完全に消去する。

第40図15は口縁下端凸状甕であるが上端も線状に突出している。頸部に半円形の両面穿孔がある。

第40図20は中期末、あるいは後期の甕形土器の口縁部で、いちじるしく時期が下る。口縁の端部は面取し、刻目がありそうであるが、風化のために判然としない。

鉢形土器 大型壺の口縁部かも知れない。口は大きい、口縁部はあまり拡がらずに、端部を平坦に面取りし、頸部に段差を付設する。第38図5は端部に1条の沈線が横走するが、その後の撫で調整で潰れてしまい条溝がはっきりしない。外面は丁寧に研磨して仕上げ、そのため頸部の段差がつぶれ、突帯のように線状の稜線が突出する。第38図6は口縁の下端に細かい刻目を装飾し、頸部に顕著な段差を付設する。

4. 底部の破片

底部は小片を含めて12点が出土したが、1例はその口頸部が胎土、発色、調整法から特定できる個体である（第38図11）。縄文土器と弥生土器に顕著な差があり、粗いものは縄文土器（第41図1～8）、刷毛目や磨きで調整し、作りの丁寧なものは弥生土器（第41図9～11）である。

縄文土器の底部は外周を後付けするので、接地部が外側に突出する。極端な例は丸底に環状の粘土を貼り足すので、脚台状の凹底となる（第41図5）。例外は薄手の土器であって、この例には底部の外周に粘土の貼り足しが無い（7）。

これにひきかえ、弥生土器は円盤形の底部に胴部の粘土を上積みし、調整する。

5. その他の遺物

4 A区 SP10 遺構 遺構内の埋土から出土した。弥生前期の壺形土器の下胴部の破片である。外面は研磨調整し光沢がある。内面は針葉樹の板による粗い刷毛目で調整する（第 69 図 1）。

4A 区包含層 包含層から出土した縄文・弥生土器には次のようなものがある（第 70 図）。

後期の黒色研磨土器で、浅鉢の破片である（第 70 図 1）。磨消縄文の輪郭となる横線がわずかに残る。

2～4 は晩期の土器で、2, 3 は精製の浅鉢、4 は粗製の深鉢形土器である。2 は大きく開いた口縁部の端部を内面側に肥厚させ、補強する。3 は口頸部の屈折する箇所欠損した破片である。4 の薄手の粗製土器で、外面を条痕で調整するが、その上をさらに横撫でしたようで、条溝が浅い。内面は横方向の削り面である。

5, 6 は前期の弥生土器であるが、もしかすると5は刻目突帯文土器にともなう壺形土器かもしれない。口縁部はあまり発達せず、端部を面取せずに丸く仕上げる。頸部が内湾し、外面は丁寧に研磨するが、内面の研磨は粗く、磨きの境界線がのこる。口縁部に黒斑がある黒縁土器である。6 は壺形土器の頸胴部の境界で、明瞭な段差を付設する。

7 は縄文土器の底部である。

6. 出土土器の意義

今回出土した刻目突帯文土器は、古い時期のものが混じっているが、多数は刻目が大きく、口縁断面が半円形で、撫で調整のものである。それが時期の新しい刻目突帯文土器で、前期弥生土器と同時期である公算がたかい。こうした特長をそなえた刻目突帯文土器の発見はたぶん初例であるが、いっぽう精製浅鉢形土器は種類が多いので、口頸部が曲線的に内湾する型式以外にどれがこの刻目突帯文土器に供伴したのであろうか、推理することはむずかしい。

前期弥生土器の特長は、とくに甕形土器がいわゆる段甕だけからなる所にある。このような段甕からなる単純な存在も初例であって、調査区を拡大すれば、通常の甕形土器も出土したのではないかと思われる。段甕の口縁部は断面が如意形になるものが多く、豆谷氏によるとこの特長は「口縁下端凸状甕」でも後出であるとされる。したがって刻目突帯文土器と伴うのは、板付 I 式と共通する口縁の端面に刻目を装飾する甕形土器の少数例（第 38 図 10, 11）だけであって、多くの前期弥生土器はそれに後続すると考えることもできる。